

## 乳がん検診（巡回）

### 動 向

協会の乳がん集団検診は、昭和52年厚木市、53年からは神奈川県、55年より横浜市より受託し検診が行われてきた。いずれも視触診による検診である。昭和62年、乳がん検診が老人保健法に組み入れられ実施主体は全て市町村に移行した。

国は、平成12年に乳房エックス線撮影（マンモグラフィ）併用検診を指針に盛り込み、協会でも15年より検診車によるマンモグラフィ併用検診を開始した。17年には装置2台搭載検診車を増車し、更に20年3月には、神奈川県より新たにマンモグラフィ検診車の貸与を受けて更に検診態勢が整備された。新検診車はCR装置を追加搭載して稼動している。

また、国の指針では対象年齢を40歳以上隔年としているが、神奈川県内の集団検診では、30歳以上や40歳以上も全年齢としている市町村も多く、対象者は市町村により異なっている。

協会も平成18年より乳がん撲滅のためのピンクリボン運動を展開しており、これに呼応するかのように入診者も増加傾向にある。特に新検診車は全国の子供達が描いた絵をラッピングしており、ピンクリボン運動等啓発活動にも貢献している。

21年度より国の子育て支援の一環とし、5月の補正予算に「女性特有のがん検診推進事業」が設置された。国が100/100の予算にて実施。乳がん40歳～60歳の5歳刻みを対象者に、各市町村より検診手帳とクーポン券を送達し受診率向上を図った。

検診の実務ならびに精度管理は、当協会が事務局を引き受けている「神奈川県乳がん集団検診協力医療機関連絡会（会長＝福田護・聖マリアンナ医科大学附属研究所プレスト&イメージング先端医療センター附属クリニック院長）」の指導により遂行されている。同連絡会は「神奈川県生活習慣病対策委員会がん・循環器病対策部会乳がん分科会（事務局＝神奈川県健康福祉局保健医療部健康増進課）」の指導のもとに運営されている。

マンモグラフィ検診については、連絡会内に「マンモグラフィ運営委員会」を組織し、撮影ならびに読影の精度管理について協議する場を設けている。

### 結 果

検診受診者はここ2～3年は増加傾向にあったが、21年度は初診者、再診者ともに増加し7,000人増の29,171人で、視触診群は減少してマンモグラフィ併用群が7,000人以上増加した。ようやくマン

モグラフィの各方面の努力が実り、その効果が一般に認知されるようになった感がある。要精検率は10%をやや越える程度であり変わらないが、精検受診率20年度の56.6%より大幅に増加し過去最高の82.4%と、横浜市のそれに近付いた。これも視触診群の精検受診率が減少しマンモグラフィ群のそれが急増したのに表れている。

がん発見数も78例発見率も0.27%と増加し、対象者が異なるため一概には言えないが、視触診群2例0.03%に対して、マンモグラフィ群76例0.33%と大差がついた。早期発見が乳がんの救命率、乳房温存率を高めることが、認知されつつあることと理解したい。

まず検診成績の評価には、検診結果の把握が最も重要で未把握者が18%もあるのは、検診精度あるいは検診成績の評価のために望ましくなく、長年の懸案であるが改善があまり見られない。

検診に携わる者全体の自覚が必要で機会を作って広く訴える必要がある。

さて、受診率、がん発見率の向上と共に要精検者の陽性的中率、両群合わせて2.4%、視触診群1.6%、マンモグラフィ群2.6%とまだ低い精検受診者では1.6%と3.1%とまだあまり高いとは言えず、検査の精度管理にまだ努力が必要とされる。視触診医とマンモグラフィの読影者の力の向上のため、症例検討会等を行っているがまだ参加者が少ない。県域特に中西部では各施設間のコミュニケーションが執りにくく、精度の管理にもう一工夫必要かと思われる。

分散した勉強会等案を検討中であるが、診療に追われる現状ではまだ実現していない。デジタル・マンモグラフィ化が進み電送による遠隔読影が早く可能になることが望まれる。

次に年齢階級別では、55～69歳と比較的高齢者の受診率、がん発見率が高く陽性的中率も3.8%と高いのに反して、40～54歳代の受診率、陽性的中率が低めで、マンモグラフィの限界が見えてきているのかも知れない。最近若年者の受診希望が増加しているが、若年から乳がんに関心をもつのは望ましいことで、超音波併用検診の実用化を進めることも近い将来のためにも必要と考える。当協会では超音波併用検診を30～40歳代に企業検診や施設検診では積極的に行っている。まだ十分用意が出来ているとは言いがたいが、自治体の要請があれば協力したい。

関係の集計表は108頁に掲載